

【表現学関連分野の研究動向】

日本語文法(史的研究)

米田 達郎

今期も様々な観点に立った研究成果が発表された。特にCHJ(日本語歴史コーパス)を用いた日本語史研究は盛んに行われている。20年前と用例を検討することに異なりはないものの、用例を収集する時間が極めて短く、良い意味で研究成果を出しやすくなっている。

『データに基づく日本語のモダリティ研究』(くろしお出版)所収の小木曾智信氏「通時コーパスに見るモダリティ形式の変遷」では、CHJに収録されている各時代を代表する文献で使用される助動詞ム・ベシ・ラムなどを調査している。古代では多用されていた形式が、近世・近代になると助動詞ム・ベシに収斂されていくことを指摘する。このことは、古代語から近代語へとモダリティ形式の質的な変化を示しており、CHJが日本語史に貢献することを如実に示している。

また『シリーズコーパスで学ぶ日本語学 日本語の歴史』(朝倉書店)では、奈良時代から明治・大正時代までのCHJを利用し(時代区分については本書参照)、これまで見過ごされていた事実を指摘している。例えば市村太郎氏「江戸時代」では、洒落本で使用される断定の助動詞「だ」「じゃ」を取り上げ、上方版洒落本『阿蘭陀鏡』に、江戸語の特徴である「だ」の使用が認められることに着目している。その上で、「だ」の使用者が「聞きかじった『江戸なまり』を使用して通ぶっている登場人物という設定」(128頁)であるために、上方版洒落本で「だ」が使用されていることを指摘している。この指摘はCHJを利用することで新たに問題点を設定でき、明らかになったことである。

ただし、CHJを用いた研究結果は日本語史のすべてではない。特に近世・近代を対象にした場合、このことを意識する必要がある。CHJは、口頭語を反映した資料が大半を占める。そうでない資料から伺える表現も日本語史である。CHJを利用する功罪を知る必要性は、提供する側される側にとって高い。

文法史研究の成果を教育の場で活かす取り組みも期待される。富岡宏太氏「日本語学の活用方法—国語科教育のために—」(『群馬県立女子大学紀要』第41号)では、文法史を教育現場に反映させていくことが論じられている。ここにCHJを活用する方向性なども示されていても良かったのではないか。

田中草大氏「変体漢文の構文論的研究—受身文の旧主語表示を例に—」(『国語国文』第89巻第11号)では、『平安遺文』所収の変体漢文文書に見られる受身文について考察を加えている。ここでは「ニ」による旧主語表示は発達しておらず、「ノタメニ」が主に担っていたことなどを指摘する。田中氏は近世以降への影響も視野に入れており、今後発展が望まれる領域である。

『日本語文法史キーワード事典』(高山善行・青木博史編)は、各項目に用例が挙げられており、初学者に限らずわかりやすい内容である。持ち運び可能な点もありがたい。

上記研究以外にも、着実な研究の積み重ねが結実した論考が多数あった。敬意を表しておきたい。

(大阪工業大学)